

# これからのことを…4の(3)

●方丈記から(3)

(写真は全てネット検索です)



方丈庵跡の碑

## 方丈記のこと

まるごと館たより 128号、129号に書きました五大災厄(大火、辻風、遷都、飢饉、大地震)についてを、鴨長明は日野の方丈庵で書いていった。1212年長明58歳の時です。例えば、大火はこの時より35年前のことですが、とても詳しくて今日か昨日の出来事のようなタッチで書かれています。記者顔負けとの声も。

時代は平安から鎌倉(1185年)に向かおうとしている時、頻発する源平の争乱の上に、これらの災厄が京の民を襲うという中、とても痛ましいことが続いていた。それを長明はひとつひとつ自分の足で歩いて、つぶさに見て感じて書いた。

『ゆく河のながれは絶えずして、しかも、も



河合神社方丈庵復元より(再度載せました)

との水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつむすびて、久しくとどまるためしなし。世の中にある人と栖と、またかくのごとし』とは、身近に起こった災厄や自分自身の半生を振り返って書いたのだと思います。だから、とても信ぴょう性があります。若い頃ならわからないだろうと思うことが、年齢を重ねる中で身近な人の病氣、死、体の衰えなどで長明さんの無常観が痛いほど伝わってきます。これだけの災厄に遭わなくても、です。

長明さんが見たその当時の京の状態は地獄だったという。世の中の無常を詠いながら、その中でも忘れてはならない、忘れられない心に染み入るできごとがあった、と。それを『いとあはれなる事も侍りき』と書いた。

この人生で自分より大切におもえる人に出会えているか。飢饉のところのお話です。それが前号までのまるごと館たよりの内容です。方丈記は原文にして文庫本40ページもないですが、その前半部分はこの災厄のことで占められています。

それが前号までのまるごと館たよりの内容です。方丈記は原文にして文庫本40ページもないですが、その前半部分はこの災厄のことで占められています。

## 八幡まるごと館だより

2020年9月13日/130号

<発行>八幡まるごと館/八幡市男山松里12-20

(TEL&FAX) 075-983-3664(9時~17時)

(E-MAIL) [yawata@marugotokan.net](mailto:yawata@marugotokan.net)

ホームページは <http://marugotokan.net/>

又は、八幡まるごと館で検索して下さい



### 今に響く

800年余前に書かれたものが、東日本大



下鴨神社の河合神社

震災に被災し、この方丈記を手にとったという方も。この本が最も読まれたのは戦中、戦後だったといえます。思いもよらぬこの時をどう生きていくか、何かのヒントを得ようと。また、過去に多くの作家からも方丈記関連の本が出ています。印刷技術もない鎌倉時代に書かれたものが未だに読み継がれている。(徒然草や枕草子等の古典の本もそうですが)。800年前と言っても、少しも古びていないどころか睿智さえ。

### 『すべて、世の中のありにくく、

我が身と栖(すみか)との、はかなく、あだなるさま、また、かくのごとし。いはむや、所により、身のほどにしたがいつつ、心を悩ます事は、あげて計ふべからず。』(訳・おおよそ、世の中が生き難く、我が身と住居とが、はかなく、むなしいさまは、今まで述べて来た通りである。いわんや、場所により、身分、身分にしたがって、心を悩ますことは、いちいち数えきれないほどである。)

方丈記後半はじめの部分、長明自身のことが書かれています。以前も書きましたが、下鴨神社の正禰直惣官だった父親が34歳で亡くなると、長明(当時18歳位)の落胆ぶりは周囲にもわかるほどに。後援者も後見人もなく、多分それまではとても大事にされてきたのでしょうね。惣官の跡取りだったのですから。

長明は父方の母の家で30歳過ぎまで暮らしていましたが、ここでも『縁かけて』と、出て行かなければならない事情があった。そ

の後、鴨川の河原近くに居室を設け、『これをありし日の住まいにならぶるに、十分が一なり』と。それでも277、8坪で、祖母の家は2778坪だったそうです。それに対して方丈記を書いた草庵は2、778坪。

長明31歳、元暦の大地震(1185年)の数ヶ月前に平家は壇ノ浦で滅び、鎌倉幕が誕生しました。

### たがひめ 長明の出家

思い通りにゆかないことが続く長明。『すべて、あられぬ世を念じつつ、心を悩ませる事、三十余年なり。その間、折々のたがひめ、おのづから、短き運をさとりぬ。すなわち、五十の春をむかへて、家を出て、世を背けり。もとより妻子なければ、捨てがたきよすがもなし。身に官禄あらず、何かにつけてか執をとどめん。むなしく大原山の雲にふして、また五かへりの春秋をなん経にける。』(訳・すべて、生きていきづらい世の中を辛抱を続けてきて、心を悩ましたこと、三十余年間である。その間、そ



50歳で出家して大原こ

の時、その時のつまずき、自然と自分の拙い運をさとした。すなわち、五十歳の春を迎えて、家を出て、この世を背いた。もともと、妻子はいなかったの、世を捨てがたく思う縁もない。身に官位・俸禄があるわけではなく、何につけて執着をとどめることがあるうか。いたずらに大原山の雲にふして、また五年の春秋を送ったのだった。)

父の死以来、何事もうまくいかなかったたようだ。長明は和歌と音楽の才能があっ

たようで、47歳の時に和歌所の寄人(職員)に抜擢された。「新古今和歌集」編纂という歴史的な瞬間に遭遇。そうそうたる歌人に交じって、とても充実して生き生きと過ごしていたそうです。

励む姿が後鳥羽院の目に留まり、父が勤めたことのある河合神社の禰宜職がひとつ空き、院は長明にその職をあたえようとした。

長明は父も歩んだ道でもあり、とても喜んだが、同族の強い反対にあい、院はその話を撤回せざるをえなかったようだ。院は別の口を紹介したが、長明は振り向きもせず、宮中

**＜8月にこんなことをしました＞**



**20日** とても暑い中を皆さん来て下さいました。以前も講師の出口修さんが話して下さいましたことがある安居神事のお話でした。以前は江戸時代、この神事で今はわからなくなっている猪鼻坂から大きな松を引き上げたとお聞かされたことがありました



**24日** 皆でオカリナを吹くというのは楽しいなあと思います。合わない所が多々あるのですが、それをみんなで「ふっ、ふっ」って笑って顔



**27日** 出口宏子さんが切り絵を出来る様に用意して下さい、中々いい作品が出来上がりました

から失踪して出家へと。大原で五年の時を過ごす。長明にとってとても辛い出来事だったといひます。

この期間のことはあまり書かれていなく詳しいことはわからない。色々読んでみましたが、この辺りの話ほどの本にも大きな出来事として書かれています。

**方丈記の魅力はまだ続きます**

この方丈記を書いている草庵という空間、自然が長明はとても気に入っていたようです。これは次回に書いていきます。同じことをダラダラと書いてきました。鴨長明のこと

**八幡の歴史**

最初は平安終わりか、鎌倉初めに行われた安居神事。実施され頭役になってもらうことによって八幡宮有力

社家は富裕層のエネルギーを発散できると。頭役は当時50貫というお金を一晩で放出したけれど、その頭役の側にもそれに見合うものがあったということです。今のお金では2000万円以上です。接待やらにつかったそうです。

**オカリナひまわり**

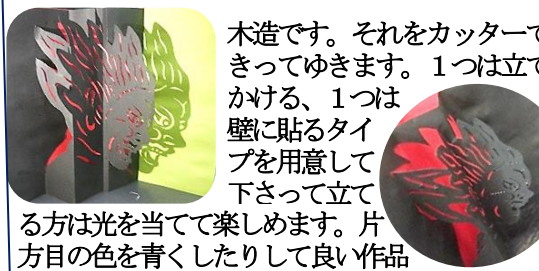
を見合わせる所なんか素敵です。他では駄目だしをされるでしょうが、それがやっていくうちに改善されるというのもいいです。そういうゆるい練習をしています。でも曲数は多いです。たくさん

吹く中で色々な事を自分で獲得していつている。時々一人でふいても気持ちがいいものです。

**折り紙教室・切り絵**

た。これは奈良興福寺の十二神将が原型とのことでした。守護神の性格をあらわすために武

装して仏敵をおどし、人々の悪い心に対して激しく怒っているのだそうです。鎌倉時代、国宝



**八幡まるごと館 9月・10月の予定**

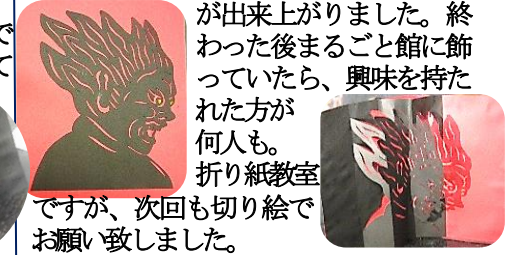
<b>＜パソコン教室＞</b>	毎週月曜日 10時～12時です
9月7日(月)10時～12時	参加費 300円(コーヒーつき) 9月14日、28日パソコンを持って来て下さい。講師の吉田さんはお休みされます。
<b>＜オカリナクラブ ひまわり＞</b>	楽しめる時に
9月7日(月)13時～	参加費100円 残り9月は14日、28日です。
<b>＜絵手紙講習会＞</b>	
9月9日(水)13時30分～	講師 森本玲子さん参加費 400円(コーヒーつき)
次回は10月14日(水)です	
<b>＜歴史を学ぶ 新八幡の歴史 N023＞</b>	
9月24日(木)13時30分～	講師出口修さん 参加費100円 月1回です
<b>＜楽しい理科の実験 N034＞</b>	<b>アイスクリームを作ります</b> 8月出来ませんでした
9月25日(金)13時30分～	講師木下章司さん 参加費300円(コーヒーつき)
<b>＜折り紙教室 第12回＞切り絵</b>	どうぞお楽しみに。
9月30日(水)13時30分～	講師 出口宏子さん 参加費材料代は100円
持ち物	カッターをお忘れなく

**ここに続きます**

を筆者にどれだけ理解できたかはわかりませんが、方丈記のことが、ずっと頭の中にありました。

どう読んだらいいか何冊かの本を読みました。色々です。でも、どう読んでもいいのだと思ったら、気が楽になって今書いています。読んだ人が感じるままを。古典と言えども、今の本と同じです。でも、長く読み続けられたものにはそれだけの魅力があるのだと思います。

次は草庵での生活。今では庵を作るにしても誰の土地かという制約が出て、800年前のようにはいきません。長明が家の大きさや身分に拘るのは小さい頃にはそれなりの生活、恵まれた環境の中で育ったというのがきっとあります。そういう人が草庵での生活を楽んでいる。父の死後から五大災厄を経て、草庵に至るまではしんどかったのです。草庵での生活を次号に書きます。だらだらと申し訳ありません。



**9月 21日(月)は休館します**

が出来上がりました。終わった後まるごと館に飾っていたら、興味を持たれた方が何人も。折り紙教室ですが、次回も切り絵でお願い致しました。

**＜あんなこと・こんなこと＞**

\* 秋のまるごと市の問い合わせの電話がありました。とても残念ですが、実施してもお客さんが来られないのではと思います。まるごと館は当分常時行っている講習会を絶やさないように進めていけたらと。11年余りやってきて、初めてのことで、落ち着かなくて色々な思いを経て今に。方丈記を読んでみたのもそのことが大きい。何か読んで変わったかと問われれば、不安はいつの間にかなくなっています。今までの所で書けるとしたら、やっぱり人との関係を大事にすること。何かの縁があって知り合った方々と。  
\* コロナ禍の時、お家に閉じこもりがちになってきています。人と話をする、会うというのはとても大切なことです。元気をもらえたり、勇気づけられたりします。まるごと館で一番助かっているのは筆者です。(うえたに じゅんこ)